

John Dee における天体からの放射物としての光と形象 — 想像力の鏡としての人間 —

坂 元 正 樹

序

この論文で取り上げていく *Propaedeumata Aphoristica* (『初学者のための箴言』、以下『箴言』と表記する。) はジョン・ディー (John Dee, 1527-1608/9) の最初期の著作である(1)。この書物には、すでに名声を博していたディーが、学問を修める際に最も重要であり、その基盤となるであろうと考えていたことが書かれている。それは、星辰の及ぼす影響力の働き方についての書物であり、また、光学的、幾何学的、認識論的示唆に富んだものである。そして、そこには彼の、すなわち十六世紀後半のイギリスにおいて存在していた自然〔世界〕認識のあり方の一例を見ることができる。

この論文では、主として、『箴言』の記述の中心を占めている、光線 (radius) に焦点を当てていく。そこには、コールダー(2)及びクルリー(3)によって指摘されているように、アルキンディーやグロステスト、そしてロジャー・ベーコンなどの光学、自然哲学からの影響が強く見られるが、むしろ、単なるその引き写しではない。

『箴言』は120の箴言からなり、それぞれの長さはまちまちである。前後の関連性は、薄いように見えるものもあるが多くは明確であり、直接的な前後の連関が明確でない場合でも、それらの箴言のおかれている場所は、全体として適切で、最初のものから最後のものまで連続性が維持されている。

この120の箴言を通して語られていることは、『箴言』の副題にも「卓越した自然の力〔力能〕(virtus)についての」とあるように、自然界に働いている力に関することである。その力とそれを実現させている形象〔像、特質〕(species)及びその形象を運ぶ〔内に秘める〕光線(radius)の三者を、デューはほとんど互換的に使用し、密接に関係づけている(4)。そして、主に、光線の持っている性質、及びそのふるまいについての、光学の理論に基づく記述、考察を通して、それら三者について、すなわち(四元素からなる)自然界に存在するものすべてに働いている力について、の説明がなされるのである。

1. ものの存在、運動と形象

1番から29番の箴言が、『箴言』全体の基礎をなしており、そこでは他の部分より普遍性の高い形での記述がなされている。30番以降においては、ほとんどの箴言が天体〔星、惑星〕からの光線、光、力等々に関する記述であるのに対し、1番から24番までの箴言には、「天体からの」といった限定がついておらず、25番から29番までの箴言は、24番までの箴言を天体からの光線に関して敷衍したものである。

まず、1番の箴言では神による無からの創造の絶対性が述べられている。そして、2番においては、その神の創造物に対して、人間が火〔理性、技術〕を用いて、大きな変化を与えることが可能であると語られている。

神が論理(rationis)と自然の法則に背いて、無から万物を創造したように、神の超自然的な力なしには、どのような創造物も論理と自然の法則に背いて無に帰することは決してない。【1番】

実際に、もし我々が火の原理(pyronomia)を用いてうまく自然に

働きかけるならば、目をみはる変化が我々によって自然物にもたらされるであろう。私は創造されたものすべてを自然と呼んでいる。【2番】

自然秩序内における運動によって、気づかれているような存在だけではなく、自然の中に隠れている種子のような存在についても、知恵ある者は説くことができる。【3番】

運動によって存在しているものはすべて、世界のさまざまな部分に、それぞれ自身のありかたで世界全体を満たす光線を球状に放射している。したがって、世界中の場所が、運動によって存在しているすべてのものの光線を保持している。【4番】

3番、4番の箴言では、存在と運動、そして運動と光線との関係が語られている。運動はそのものの存在を我々に気づかせるものであり、その運動に伴って、光線が放射されているのである。

また、3番では、運動している存在物だけではなく、運動をしていない、「自然の中に隠れている種子」のようなものの存在が呈示されている。ディーにおいては、ものの存在は運動のみによって原因づけられるわけではない。そして、この運動なしに存在している種子のような存在についてだが、次の4番では、光線の（そして形象の）放射は、運動によって（もしくはそれに付随して）起こる現象であるとされており、その種子のような存在は、光線を放射してはいないようである。では、知恵あるものはいかにしてその存在に気づくのであろうか。これについては後に3. でふれる。

『箴言』で述べられている光線 (radius) には、後に述べていくように、たとえば、光、形象などが含まれている。

実像 (substantia) と仮像 (accidens) の両者が、自身の形象を自分自身から発している。しかし、すべての実像は仮像よりはるかに優れている。

実像においても、非身体的で精神的なもの、もしくは精神的に振る

舞うものは、この機能において、身体的なもの、不安定に結合された元素からなるものを、はるかに凌駕する。

しかしながら、ものは、それが高貴であればあるほど、自身の形象を不完全なものとする。そのため、完全な形象にはその第一の作用因と同じ名前があたえられる。【5番】

アリストテレスに端を発する用語である、実像〔実体〕(substantia)と仮像〔偶有性〕(accidens)がここでは用いられている。substantiaは個別のもの、もしくはものの本質と本質的な性質を指し、accidensはそういった性質を変えることなく、その個別性を定義せしめる(付帯的な)特徴(肌の色が白い、等)を指す(5)。accidensは変化しうるもので、substantiaは変化しないものであると特徴づけることもできる。

5番の箴言において、ディーは、形象を放射する能力において、仮像よりも実像のほうが優れており、実像の中においても、精神的なものが具体物よりもその能力に優れている、ということを、そして形象は本体の不完全な写しであるということを述べている。形象を放射する能力の優劣というのは、影響力の強さにおけるものであり、また、この写しの不完全性におけるものでもあるだろう。

『箴言』において、仮像(accidens)がどのような意味で使用されているか、すなわちディーがどのような光線を付帯的なものと呼んでいるかについては、48番の箴言が大きな示唆を与えてくれる。

太陽が我々の真実の地平線より下にあるとき、太陽は我々に空気を通して、その仮像の光(lumen)の光線をもたらし、その光(lux)が夕暮れをみせる。したがって、三つの上部の惑星と、多くの固定された星々は、それらが、太陽が夜明けの始まりや、夕暮れの終わりのときにある位置よりも低い位置にあるときには、それらの、仮像の光(lumen)の力を用いて、(それは太陽の光よりは弱いものではあるけれども)太陽が夕暮れで行うようにして、我々に力を伝達しているのだろう。太陽より下部の惑星たちもこのようにしていると考えられる

と私は主張する。

私が述べてきたように、これは、どんな（すなわち、直接にでも屈折してでも反射してでも）本質的な光線を通して行われることでもなく、形象の形象を通して行われることなのである。熟練した哲学者たちは、光学と反射光学において一般的にそう言っている。

太陽の黄昏がなぜいつも同じでないのか観察しなさい。そして、他の惑星の黄昏についても、（私がいまそこで述べたように）同じ研究方法でもって、観察しなさい(6)。【48番】

ここで、ディーは夜明け及び夕暮れ時の、直接には照射していない太陽からの光による明るさに関して説明を行い、その理屈を同様に適用することにより、地平線下にある星々がいかにして我々にその影響力を伝えているか、ということに関して説明を行っている。

そのさいに、実像の、本質的な光線は、たとえ屈折しても反射しても、やはりそれは変わらず実像であり(6)、形象の形象(7)、すなわち間に何らかの媒介物（この場合は空気）を介して伝えられるものが、本質的でない、仮像のものである、ということをも語っている。

この48番の箴言では、（それが仮像のものであっても）光に、星辰の力を我々に伝達する能力があることが語られている。その光は、後に詳しく述べるように（そしてまた48番の記述からもわかるように）、形象の一形態、もしくは形象を伝達するものである。『箴言』における形象と光との関係について考察するときには、そこにおける *lumen* と *lux* の区別を明確にしていく必要があるが、そのさいにも、48番の記述は有用である。

2. 光 (*lumen* と *lux*) と形象

中世の科学的なラテン語の語彙においては、外的な作用者としての光が *lumen* で、その心的表象が *lux* である(8)。その区別は、ディーにおいても基

本的にはあてはまる。15番では、lux が人間の感覚にさらされているもの、としての光として用いられている。

円運動よりも完全な動きはなく、人間の感覚にさらされている現象 (forma(9)) の中で光 (lux) より重要もしくは優れたものはない。したがって、この両者が、もっとも重要で完全な具体物 (corporeus) を特徴づけるものである。【15番】

さきに挙げた48番においても、「太陽は我々に空気を通して、その仮像の光 (lumen) の光線をもたらして、その光 (lux) が夕暮れをみせる。」とあるように、光線の光は lumen で、我々が見る夕暮れは lux で表されている。48番と同様な lumen の用いられ方が、53番にも見られる。

太陽の光 (lumen) が月を通してもたらされるということや、月が太陽なしで、太陽の知覚可能な光線に浸されずに、それ自身で何をもたらすことができるのかということを学びたい者はみな、満月から、そして休止を伴う皆既月食から、反射光学の理論を用いて知ることができる。同様の経験の尺度をさらに別のものに適用してよいのは、言うまでもないことである。【53番】

48番においても53番においても、太陽の光が lumen で表されているが、それが光線であるからなのか、間接的なものであるからなのかは、そこにおける記述だけからでは明確には判別できない。だが、実はその区別は、あまり意味のないものと言えるのかもしれない。なぜなら、以下で述べていくように、lumen は lux の形象であり、上に挙げているような、光線である、間接的なものである、といったことは、lumen が形象であるが故の存在様式であるからである。

星からの光は総じて lumen で表されているが、その光 (lumen) は太陽を源泉のようなものとするものであるということが、(太陽を含む) すべての星

からの光 (lumen) に熱が含まれていることを述べている 94、95 番で語られている。

すべての星々は光 (lumen) を分かち持っているのと同様に、(特別な、知覚できない光線の力だけでなく) あるものの熱の原因にもなる。

【94 番】

太陽は、大きさにおいて、他のものを卓越する唯一の天体であるのと同様に、天体の光 (lumen) の尽きることのない、広大な源泉のようなものでもある。それと同時に、我々の知覚においては、熱そして生命の独自の創始者である。【95 番】

このように、同様の意味ではないにせよ、『箴言』においては、月の光も、星々の光も、太陽を源泉とするものであるということが述べられている。そして、そうした光 (lumen) の源泉となる太陽の光は、lux で表されている。

また、ここまでに挙げてきた部分以外にも、月と太陽の他の惑星からの卓越を語っている 102、104 番において、lux は太陽にもっとも固有なものとされている。

光 (lux) と動きは天体においてもっとも固有な (propria) ものであるが、惑星の中で、太陽は、光 (lux) の固有性でもって他のすべてを上回り、月は、その固有の動きの活発さでもって、残りのすべてを打ち負かす。したがって、これら二つが、すべての惑星の中でもっとも高貴であると、当然みなされる。【102 番】

この 102 番においては、太陽以外の天体も lux を持つものとし、それとの比較から太陽の卓越性が言われている。

ディーにおいても、太陽の光 (lux) は、星々において分有されている。

しかしこの lux は 15 番でも述べられているように、心的表象としての、知覚されたものとしての光をも表している。それに対して、lumen は、光線

に含まれているような、形象 (species) の一種としての、より物質的な意味合いが強い光、を表現するものであるといえよう。lux は知覚された光を表し、また同時に、光、熱、そして生命の源泉である太陽が球状に放射し、世界中に満ちている光線に含まれる光を表すものでもあるのである。

その二つの lux は間に lumen を介した始点と終点である。lux は一なるものから発せられ、世界中にあまねく行き渡り、各々の人間において、知覚される。このことは、後の第三章でふれる作用の原理と合わせて考えると、あらたな意味合いを持つことになる。

そして、lux の持つ始源性はまた、17番で「天の物体にとってもっとも始源の動きである」と記述されている「第一の動き」のそれにも比されている。

それがなければ、他の動きが止まってしまうというのが、第一の動きの特権であるように、第一でもっとも主要な感覚の形態である光 (lux) の能力は、それがなければ、他のものは何もすることができない (10)、というものである。【22番】

この「第一の動き」は、28番で「中空な球体の鏡のような」形態をし「星からの知覚可能な光線を貫通させない硬さ」を持つ、と記されている、「第一動者 (primum mobile)」がなすものと考えてよいであろう (11)。

すべてのものの運動の第一原因はこの第一動者ではあるが、第一動者によって因果づけられた運動は、形象を通して、世界の内のものに伝達されていく、とディーは語っている。

世界の内のものはすべて、何らかの形象 (species) の動きによって絶え間なく動かされている。【16番】

ここで、ロジャー・ベーコンにおいて、星々から発せられている力 (virtus)

と光、形象(12)の関係が、どのように語られているかを見ておこう。

彼の述べるところによると、事物の存在は作用者が質料に作用することによって実現される。そして、あらゆる作用者は、基底的な質料中につくりだすその力〔性能〕(virtus)によって作用しており、以下で述べられているように力は光(lumen)であり、形象(species)でもあるとしている。そしてこの部分では、5番の箴言とほぼ同内容のことも語られている。

太陽の光(lux)は空気中にその性能(virtus)を作り出すが、それは太陽の光から世界全体にわたって拡散される光(lumen)のことである。そして、この性能は、類似性、像(imago)、形象(species)およびその他多くの名称で呼ばれている。またこれを作り出すのは実体ならびに偶有、霊的なものならびに物的なものである。しかし実体は偶有以上に、また霊的なものは物的なもの以上に形象をつくりだす。そして、この形象はこの世界のあらゆる作用をつくりだす。なぜなら、それは感覚へも知性へも、また諸事物の生成のために世界の全質料へも作用するからである(13)。

ディーにおいても、ものの力(virtus)が、形象(species)や光(lumen)を通して現れる点は、ベーコンと同様だが、その形象が果たす役割において異なる。

形象(species)に関しての『箴言』における記述について、整理してみる。

4番において、運動によって存在しているものすべてが(球状に)光線を放射していることが述べられ、そして、5番において、実像と仮像の両者が自身の形象を発していることが述べられている。光線と形象の関係については、13番で、知覚が物質からの光線の証拠であるということが述べられ、14番で、知覚が形象によってもたらされると語られていることから、光線は形象を含むものであることがわかる。すなわち、運動によって存在しているものはすべて、形象を含む光線を放射しており、そしてその運動は、16番で述べられているように、何らかのものから発せられた形象の動きに原因

づけられている。ものが運動を行うことによって、光線をそして形象を放射し、それらの形象によってまた、他のものに運動が伝えられていくのである。

このように、『箴言』における形象は、第一動者によって世界にもたらされた運動を、ものからものへと伝達しているのであり、同時に、13、14番で述べられているように、光を含む知覚物を運び、我々のさまざまな感覚に働きかけるものでもある。

25番では、形象を含む光線の内、星からのものは二重になっていると述べられている。

すべての星の光線は二重になっている。一方は、感覚で捉えられる、もしくは光の光線であり、もう一方は、より隠れた影響を与えるものである。後者は、瞬時に世界に存在するすべてのものを貫通する。前者は、それほど貫通力がないため、なにかに妨げられることがあ(14)。

【25番】

感覚で捉えられない、より隠れた影響を与える光線は、すべてのものを貫通する力を持っているとされている(15)。そして、27番において、そうしたすべてのものを貫通する力は、天体の光線の特徴づけるものであり、そうした強力な力は、すべてのものに優美に、半永久的に刻み込まれると語られている。

また、別の場所で、この知覚できない光線と知覚可能な光線との関係について、次のように語られている。

惑星の知覚できない、知性的な光線にとって、その知覚可能な光線は、精神にとっての身体のようなものである。【111番】

人やものに作用し、影響を与える、形象を含む知覚できない光線が、知覚可能な(光の)光線とこのような関係にあることによって、われわれは知覚可能な光線を通して、知覚できない光線について知り、その影響について知

る占星術を行うことが可能となるのである。

クルリーも指摘しているように、ディーは、アルキンディーやグロステストやロジャー・ベーコンの光学の、そして形象（species）の理論を、占星術の、星々から流入する影響力に関する理論へと応用した(16)。そして、それにとどまらず、運動や磁力、及び自然界に存在する全ての作用を、（形象を含む）光線の働きによるものである、としようとしているように見える。

ディーにおいては、形象の理論は、太陽と星々と人間と、そして万物との間に存在する類似性を、そして照応関係を保障するものともなっている。

3. 光線の作用と世界の調和

4番、5番において、ものが光線を、そして形象を発していることについて語ったのち、『箴言』の記述はその（形象を含む）光線が対象物にもたらす影響へと移っていく。

ある一つのものが他のものと異なるのと同様に、それらの光線は、まったく同じ対象に作用する限りにおいては、影響を及ぼす力、およびそれらの影響がもたらす結果において異なる。【6番】

一つのものから異なるものへと降り注ぐ光線のもたらす影響はそれぞれ異なる。【7番】

6番の箴言で、光線の持つ影響力と、その影響がもたらす結果が、作用者により左右されることを、7番で、被作用者によって左右されることが述べられている。そして8番の箴言において、そういった光線の作用が、作用者－被作用者の間に、なんらかの点での類似性を必要としている、ということを述べている。

ある他のものに作用するものはどれも、ある点で作用を受けるものに似ているが、他の点ではそれにまったく似ていない。もしくは、作用がないかである。【8番】

そして、それにつづけて、そうした二体間の作用に必要とされる類似は、世界の中に存在するものすべてが持ち合わせている、ということを述べている。

世界の中に存在するものは皆、秩序、調和、（他のものとの）同形性をもつ。【9番】

これは、すなわち、世界の中に存在するもの同士の間では、必ず何らかの作用が働く、と語っていることに他ならない。

ディーにおいては、世界内に存在するものがなしている秩序や調和は、それらすべてのものが持つ同形性と密接に関係している。そして、そのような調和や同形性の共有といった、もの同士の関係は、両者に何らかの類似性をもたらす。そして、その類似性は、作用を生ぜさせる。

世界全体に関しては、11、12番で、世界〔宇宙〕そして人間がリラにたとえられている。そうすることにより、その一致及び統合が、世界の中に存在する不調和の存在をも必要としていることが語られている(17)。

また、ディーは世界を四元素からなるものとしており、19、20番において、占星術師には、そうした四元素の混合物である、人間を初めとする自然界に存在する事物における四元素の配合割合を知る能力が必要であるとしている。

天体から放出される光線について、そしてそれが他のものに及ぼしている影響についての記述が、この『箴言』のほとんどの部分を占めている。すなわち、ディーはそうしたものに関する知識、理解を、占星術のそして世界認識の基幹をなしているとしているのであるが、そのような星の光線の作用と

ともに、ものを構成している物質の「元素の配合の」違いが、そのもののありようを決定するとも述べている。

元素の世界に存在するすべてのものにおける、どんな生得の相違点も、主に二つの原因からきている。物質の違いと、星の光線の作用の違いである。【1 1 3 番】

2 1 番では、3 番でふれられていた、運動によってその存在を気づかれているわけではない、種子のような存在について述べられている。

すべての種子は、その内に潜在的に、すべての生起に関する、全体のそして不変の秩序を有している。そのことは、始まりが生起する場所としての自然と、天を越えてそそぎ込んでくる力とが、協力し、調和する、ということによって説明される。【2 1 番】

『箴言』の他の場所では、種子についての説明はなされていない。だが、ディーがその影響を受けていた、クザーヌスの『学識ある無知について』(De docta ignorantia, 1440 脱稿)に、同様なイメージをもつ記述がある。

地上の事物のうちには、あたかも種子のうちに芽が隠れているように、未来に起きる何らかの原因が潜在している。それゆえ、ちょうど糸毬に巻かれているような仕方で宇宙の魂のうちに含蓄されているものは、このような運動によって展開され、伸張されると彼らは言うのである。すなわち、これらの学者たちは、石に或像を彫ろうとしてこの像の形相をいわばアイデアとして自分のうちにもっている工匠が、何らかの道具を用いてこの像の形そのものを頭の中のアイデアに即して模刻するように、宇宙の魂ないし精神は事物の原型を自己のうちに持ちながら、それを運動によって質料のうちに展開すると考え、しかもこの運動が、宇宙の魂と同様に、全てのものに瀰漫していると語ったのである(18)。

クザーヌスは中世キリスト教の伝統に従って、人間の認識を、不可視なもの〔創造者〕をおぼろに〔象徴〕をもちいて映す鏡のようなものであるとしていた。そして、その鏡に映った像である認識物から、不可視なものに至るためには、その像の厳密さが要請されるとし、その要請を満たす数学的なものの重要性を説いた。また、クザーヌスは、プラトン学説の主要な基本的諸原典に対して自立的な洞察をなし得た、おそらく最初の西洋の思想家であった(19)。ディーにおける数学の重視やプラトン主義的な考えが、クザーヌスからも影響を受けてのものである、ということは、フレンチにおいても、クルリーにおいても指摘されている(20)。

ディーが語っている種子は、何者かから放射された形象(species)に込められている力(virtus)を受けることによって、初めて生起させられ、運動するものである。そうした種子のような存在に、(3番で述べられているように)知恵あるものが気づくことができるのは、世界に存在する全てのものの間に存在する調和と秩序が存在するからではないであろうか。

以下に挙げる箴言に見られるように、ディーは、世界の中に存在するものは、どんなに小さく、つまらないものであっても、世界の調和を分かち持っていることを繰り返し述べている。

(前略)

すべてのものの第一の形態ともいえる調和、それによってすべてのものは、相互に、そして元素の王国全体に結びつけられ、全体はその小片の各々と、できうる限りに結びつく。その第一の光線を通して、あるいはその仮象の光線を通して。すべてを創り出したもっとも慈善心に富み、賢明な神がそのように定められたからである。もしそうでなかったなら、一日たりとも、自然に維持されている部分はないだろう。【75番】

元素の世界に存在するすべてのものは、どんなにちいさなものでも、

天界全体の調和の結果、もしくはその一例か再生産である。しかし、このことは、あるものの内には他のものの内によりも明確に現れる。【114番】

そして、神による世界の創造について語ることから始められた『箴言』は、その創造された世界が存在しつづけていくことについて語っている120番の箴言と、それにつづく神を賛美する言葉(21)によって終えられている(22)。

神によって創られた物々および、それらの回転は、物質的に生起させられた世界の中に存在し続けているものを、維持していくことができる。【120番】

4. 光線の作用と人間—想像力の鏡

最後に、『箴言』で述べられている人間と世界との関わりのある方に関して、14番の箴言を手がかりにして検討していく。

精神的な形象(species)にとどまらず、他の自然の形象も、光(lumen)を通してもしくは通さずに、物質から視覚だけでなく他の感覚へと流れ出る。そして、それらは特に我々の想像力にとむ精神に至り、まるで鏡によってなされるようにして、融合し、我々に示され、我々の内に驚きを引き起こす。【14番】

ディーは14番の箴言の後半部分において、形象が精神を通して我々に働きかけるさまを、鏡を用いてたとえている。

人間の認識を鏡にたとえた表現としては、ホイジンガが「中世の精神が確かに知っていた大いなる真理」(23)と呼んだ、コリント人への第一の手紙第13章12節に見られるものがある。この人間の認識の不完全さ、限界をし

めす「おぼろな鏡」の比喩は、中世キリスト教世界を通して影響力を持ち続けた。そして、そうした考え方は、前節でもふれたように、ディーに大きな影響を与えたであろうと考えられる、クザーヌスにおいても見られる(24)。

しかし、その一方で、鏡の製造に関する技術は発達していき、ヴェネチアにおいては、十五世紀に無色でひずみの少ないクリスタル・ガラスが作られるようになり、そして十六世紀の初頭には平面ガラスの裏に水銀箔を引いた新しい鏡が登場した。その、それまでの鏡とは比較にならないほど鮮明な像を映し出す鏡は、徐々にではあるがヨーロッパ中へと広まっていった。イギリスにおいても、1595年に書かれたシェイクスピアの『リチャード二世』に、リチャード二世の姿を冷徹なリアリズムで映し、地上にぶつけられることにより粉々に砕ける鏡がえがかれている(25)。また、フランシス・ベーコンの『学問の進歩』(*The Advancement of Learning*, 1605)においても、人間の心を鏡にたとえているが、その鏡は虚偽[イドラ]によって(魔法にかけられた鏡のように)曇らされているとしており、曇りのない平らかな鏡が存在するかのようには語られている(26)。

これらのシェイクスピアやベーコンの著作は、『箴言』より4、50年ほど後のものであり、ディーの時代のイギリスにおいて、新しい明晰な鏡が存在したかどうかはわからない。しかし、ディーが遊学先のパリやルーヴアンでそうした鏡にふれているということは十分に考えられることである。

金属鏡や水鏡のような、それほど明晰でない鏡を用いていた時代にも存在した鏡—太陽の象徴的結びつき(27)は、明るい鏡の登場と、太陽中心的な宇宙観を含むヘルメス主義の復興がなされた十六世紀において、新たな力を吹きこまれた。

『箴言』においては、人は、太陽が放射している光(lux)を、形象としての光(lumen)の作用を受けることにより、その内に自己の能力[想像力、共感]を用いて光(lux)を見るのである。

14番の後半部では、われわれの精神[魂]が、鏡が映すように、感覚されたものをわれわれに映しだす、その際に、想像力が機能することが暗に示されている。そしてこのことは、ディーにおいては、その形象の理論の採用

から帰結されることでもある。

作用者が形象 (species) を用いて被作用者に働きかける際には、10 番の箴言でそのことに少しふれられているように、形象は、被作用者の能力を引き出すように働きかけて、その作用を実現する。人間において、形象によって引き出され、光 (lux) を見せ、他の感覚を生じさせ、そして星辰からの影響を受ける能力を、ディーは、(それだけで説明しようとしたわけではないかもしれないが) 想像力に求めている。

ディーの『箴言』においては、非常に重要な役割を果たす、人間の外界認識に欠かせないものである想像力(28)が、同様に人間を(そのあるべき姿としては、曇りのない)鏡にたとえている、フランシス・ベーコンの『学問の進歩』においては、人間を誤らせる原因になっているのは、非常に興味深いことである。

ベーコンは、想像力のために、人間はさまざまな虚偽の幻像を押しつけられていると言う。最初の虚偽の幻像[種族のイドラ]として、人間の精神の一般的な本性によって押しつけられている虚偽の幻像の例が二つ挙げられている(29)。ここでベーコンは、天体の円運動と四元素からなる世界という、それまで広く信じられてきた世界観の根底を、想像、でっち上げであるとして退けている。また、次の虚偽の幻像[洞窟のイドラ]について、プラトンが考えた洞窟の仮定を例に用いて説明している(30)。ここでもわれわれの想像が誤るものであることを述べている。

だが、それと同時に、ベーコンは想像力の持つ力を十二分に評価していた。それは、理性に反抗する感情を御するものとして、弁論術の有用性を述べている、以下に挙げる部分にもみられる。

しかし、感情がたえず謀反を起こし扇動するのをみると、もし説得の雄弁がうまくやって、想像力を感情の側からこちらの味方に引き入れ、理性と想像力との同盟を結んで、感情と対抗しなければ、理性は捕虜と奴隷にあるであろう。というのは、感情そのものにも、理性と同じように、つねに、善への欲求があるが、感情は現在だけを見、理

性は未来と時間の全体を見るという点で異なり、そしてそれゆえ、現在のほうがいっそう多く想像力をみたすので、理性はふつう負かされてしまうからである。しかし、雄弁と説得との力が未来の遠いものを、現在のように見えさせてしまえば、そのときは、想像力の寝がえりで、理性が勝つのである(31)。

ディーにおいては、人間は（その能力に合わせてではあるが）世界の全きを体現するのに対し、ベーコンにおいては、人間はやはり、世界と切り離され、虚偽の中から抜け出せない。だが、このディーとフランシス・ベーコンとの間の差異は、この両者と中世以前の人々との間の差異と比べれば、些細なものと言えるのではないだろうか。

中世においては、人は、不完全な鏡であったがために、正しい認識に至れなかった。人間が触れることのできる、可視的〔可知的〕なものは、不可視的〔不可知的〕なものの不完全な似姿であったため、人は不可視的なもの、天界のもの、聖なるものを「顔と顔を合わせて」見るができなかった。しかし、ディーやフランシス・ベーコンにおいてはともに、人間の、その外界認識において、人間が持っている想像力の作用が重視されている。

ディーのような人々の手によって、人間の外界認識に関する問題が、（ここでは、想像力という）人間の内部の問題に設定され直されたことにより、人は直接に世界に触れることができるようになったのではないだろうか。

註

- 1 この論文において利用したテキストは、Wayne Shumaker (ed. and tr., with general note), *John Dee on Astronomy: Proopaedeumata Aphoristica (1558 and 1568), Latin and English* (Berkeley, 1978) である。

『箴言』は、1558年に第一版が、1568年に第二版が、それぞれ

ラテン語で出版された。特に表記なき場合は、1568年版を元にしたものとする。

- 2 I. R. F. Calder, *John Dee Studied as an English Neo-Platonist* (Unpublished University of London Dissertation, 1952), Chap. 5, VII-VIII.
- 3 Nicholas H. Clulee, *John Dee's natural philosophy: between science and religion* (London, 1988), pp.52-57.
- 4 Clulee, p. 46.
- 5 Wayne Shumaker, p. 207.
- 6 反射屈折によっては、光線の力が失われないということは、29番においても言われている。
- 7 この形象の形象という言葉は、ロジャー・ベーコンが『大著作』(*Opus Majus*, 1267) 第四部第三篇第一章で、付帯的な形象について語るさいに用いている。(『科学の名著3 ロジャー・ベイコン』高橋憲一訳(朝日出版社、1980)、119頁参照。)
- また、高橋憲一「グロステストとベイコンの自然観」(『中世の自然観』上智大学中世思想研究所編、1991)、209頁も参照。
- 8 『西洋思想大事典』(平凡社、1990) 第2巻、111頁参照。(ヴァスコ・ロンキ「光学と視覚」高橋憲一訳。)
- 9 1558年版では *quaritas*
- 10 この「何もすることができない」という記述は、具体的にはどの程度の範囲を指している言葉であるのか、興味を引くところである。少なくとも、ロージャー・ベーコンなどが言っているような、「光がないとなにも見えない」ということのみを指すものではないであろう。
- 11 恒星天球の外側に存在する天球でもある第一動者は、すべての動きの源であると同時に、星々からの知覚可能な光線を反射し、地球へともたらず凹面鏡としても機能している。
- 12 *species* には、大きく分けて、プラトンのイデア論におけるイデアのラテン語訳としての意味と、アリストテレス的な範疇論における、類一種一個物の種としての意味とがある。常に両方の意味が意識される必要

はあるが、以下の部分で挙げているような、伝達され、質料に形相を実現する species にはアイデアとしての意味が大きく含まれている。

- 13 ベイコン『大著作』第四部第二篇第一章。（『科学の名著 3 ロジャー・ベイコン』、115 頁。）
- 14 知覚可能な光線を妨げるなにかの一例として、さきの 28 番に登場した第一動者がある。
- 15 その具体例の一つとして、直前の 24 番で磁石の力のことが語られている。
- 16 Clulee, p. 57.
- 17 ディーがなぜ、どのような根拠によって、世界全体の一致、統合に、調和だけでなく不調和を必要としていたのか、という問題は、非常に興味深いものである。
- 18 ニコラウス・クザーヌス『学識ある無知について』山田桂三訳（平凡社ライブラリー、1994）第二部第十章、169-70 頁。
- 19 E. カッシーラー『個と宇宙—ルネサンス精神史—』菌田担訳（名古屋大学出版会、1991）、18, 19 頁。
- 20 ピーター J. フレンチ『ジョン・ディー：エリザベス朝の魔術師』高橋誠訳（平凡社、1989）第五章、115, 116 頁。Clulee, pp. 153, 154, 163.
- 21 SOLI DEO HONOR ET GLORIA と書かれている。
- 22 表紙と裏表紙には、ディーが『象形文字の单子』（*Monas Hieroglyphica*, 1564）でその意味を解き明かしている、ヘルメスの印璽をその中央部に描いた図版がおかれている。

そして、また、最期から二番目の 119 番の箴言では、ヘルメスの言葉を引きいている。

「宇宙的な共感なしには、何も人間に対して起こらない」——と三重に偉大なヘルメスは我々に言った【119番】

- 23 ホイジンガ『中世の秋』堀越孝一訳（中公文庫、1976）、下巻 67 頁。川崎寿彦『鏡のマニエリスム』（研究社、1978）、23 頁参照。
- 24 クザーヌス『学識ある無知について』第一部第十一章、44, 45 頁。川崎寿彦『鏡のマニエリスム』、24 頁参照。

- 25 『鏡のマニエリスム』、27-30 頁。
- 26 ベーコン『学問の進歩』服部英次郎・多田英次訳（岩波文庫、1974）、9、226, 227 頁。『鏡のマニエリスム』、56-58 頁参照。
- 27 ユルギス・バルトルシャイテス『バルトルシャイテス著作集 4 鏡—科学的伝説についての試論、啓示・SF・まやかし—』谷川渥訳（国書刊行会、1994）、104-108 頁。『鏡のマニエリスム』、17 頁。
- 28 この、ディーの『箴言』における想像力の重視は、フレンチによって、ヘルメス哲学者に特有なものとして、ロバート・フラッドの『両宇宙誌』と結びつけられて語られている。（フレンチ『ジョン・ディー』第五章、105 頁。）
- 29 ベーコン『学問の進歩』第二卷一四・九、227, 228 頁参照。
- 30 ベーコン『学問の進歩』第二卷一四・一〇、229 頁参照。
- 31 ベーコン『学問の進歩』第二卷一八・四、251, 252 頁。